

不随意運動を見逃さない!

～ビデオ解説による診断と治療～

堀 口 淳（島根大学名誉教授）

われわれ臨床医は、向精神薬の投与に起因する様々な有害事象を見逃してはならない。殊に抗精神病薬の投与によって発現する致死的な有害事象のうち、パーキンソン症状を中心とした錐体外路症状への対策は極めて重要である。たとえば微細な振戦や筋固縮であっても歩行障害やそれによる転倒が原因で骨折や頭部外傷などの事故が発生するからである。また口部や舌振戦などによる構音・嚥下障害やそれらによる誤嚥や続発する肺炎などは、およそ日常臨床に従事している臨床医であれば、何度も経験しているはずである。

今回取り上げる不随意運動のうち、遅発性ジスキネジア（Tardive Dyskinesia：以下TD）は、極めて恐ろしい致死的な結果を招来し得る有害事象である。TDは口舌部に生じやすく、たとえ軽微であっても、誤嚥や窒息によって致死的な結果を招くのである。しかもTDの発現頻度は高率であり、さらに第一世代（定型）と比較しても、第二世代（非定型）の諸種の抗精神病薬の投与に起因して発現するTDの割合は決して低率とは言えない。また口部に代表されるTDの存在に、患者が無頓着であったり、そ

の存在に気づいていない場合も多い。軽微な舌ジスキネジアでも、正確に見つけられるか否かは、ひとえにわれわれ臨床医の腕に係っているのであるし、それは患者の生死にも直結する大問題なのである。

本講義では、勉強目的の同意が得られた演者の自験例を中心に、ビデオで様々な不随意運動を供覧し、それらの臨床的特徴やその対応などについて論じたい。これらのビデオはこれまでに全国各地の講演で何度も引用したり、本学会の「神経学的所見のとり方実践講座」などでも教材として用いている。そこで今回はさらに新たな症例を加えて解説したい。

不随意運動への対応は、特に老年精神医学を旨とする医療者には重要であるので、他の生涯教育講演とともに学会の保存資料とし、希望者が教材として利用可能となるシステムを本学会で構築していただきたい。

本講義の演者の遂行契機は、ごく最近演者自身の患者が口部ジスキネジアが原因で餅を誤嚥して窒息死に至ったといった、悔恨の念にかられる臨床経験にも依拠している。